学習・生活活動におけるコーナー形成・活動展開の実態からみた 小学校学年スペースの空間構成に関する考察

A STUDY ON THE SPACE COMPOSITION OF THE PRIMARY SCHOOLS FROM THE VIEW POINT OF FORMATIONS OF FURNITURE ARRANGEMENTS AND STYLE OF LEARNING AND LIVING ACTIVITIES

倉斗綾子*, 上野 淳**
Ryoko KURAKAZU and Jun UENO

This paper aims at considering to reform 'spaces of each grade' by analyzing formations of furniture arrangement and style of learning and living activities. In this study the following subjects were surveyed on 'spaces of each grade' of 5 public primary schools. 1)Measuring of furniture arrangement there, 2)observing class' activities all day, 3)mapping of pupils' learning and living activities. Finally, through those survey, these conclusions indicated. 1)There are some various of furniture arrangement and style of learning and living activities in 'spaces of each grade', and these can be classified some types. 2)It's clear that furniture arrangement and learning activities affect each other. 3)The meaning of the space in which no furniture are arranged can be found by researching formations of pupils' activities there.

Keywords:Primary School, Learning and Living Activities, Class Space, Open Space,
Informal Style Learning Activities, Furniture Arrangement

小学校, 学習・生活活動, クラススペース, オープンスペース, 学習展開, コーナー

1. 背景・目的

1. 1 目的

本稿は既発表論文(文献(8))に続くもので, 小学校建築の空間構成の再構築を検討する一連の研究の第2段階としての位置づけを持つ。前稿では, 近年ますます多様性を帯びようになった小学校の学習・生活の全般を詳細に検討したが, この中で, 児童は1日の6~7割の時間を自らのクラススペース(以下:C.S.), または学年オープンスペース(以下:O.S.)を含む「学年スペース」¹⁾周りに滞在していることを明らかにした(図・1)。すなわち, 小学校建築においてC.S.とO.S.から成る学年スペースは最も主要な場であることを再認識する結果となった。そこで本稿では, この学年スペースに焦点を絞り, 1)そこに家具やメディア, 教育機器等によって具体的にどのような学習・生活のための場・コーナーが形成されているかを検討する
2)一口に多様な集団編成, 学習形態と言われているが, 具体的にはどのような学習・生活の展開が実際に登場しているかを収録する
の2点を中心に実態調査に基づいて整理・検討し,
3)これらを総合的に検討する中から「学年スペース」には具体的にどのような空間構成が求められるかを考察することを目的とするものである。

1. 2 背景と問題意識

本稿を含むこの一連の研究の背景と問題意識は前稿に詳しく論じておいたが, ここで改めて要約しておく。

我が国の公立小学校計画に「O.S.・多目的スペース」が登場したのは1970年代後半のことである。60年代後半からのイギリス, アメリカにおける学校改革に触発されてのことではあるが, その「学びの場」としての開かれた環境構成の持つ意義には当時, 強いインパクトがあり, 「学習・生活の個別化・個性化」の教育実践を誘発してきたという経緯がある。その後, 1984年の文部省による「多目的スペース補助」の制度発足も大きな力を持った。O.S.を有する学校は急速に増加し, 1996年には同スペースを有する公立小・中学校が5,000校に及んだと報じられている。すなわち「O.S.・多目的スペース」を有する学校計画は今日, 定型として迎えられつつあると考えられる。

しかし, 全国的に広まりつつあるこのO.S.計画の実態を冷静に眺めてみると必ずしも楽観的に捉えることはできにくいと考える。このことは, 家具やメディアの展開が見られず, また実際にも使い込まれず, ただいたずらに広漠たるスペースが拡がっているだけの空疎な事例が多いこと等に象徴される。これには様々な背景があるが, フレキシビリティを重んじるあまり均質的なスペースを漠然と設けることに終始し, そこにどのような場が形成され, どのような学習・生活の展開が起きるかを具体的に想定し得ていない計画事例が多い

* 東京都立大学大学院 大学院生・修士(工学)

** 東京都立大学大学院 教授・工博

東京工業大学文庫施設研究開発センター 非常勤講師

Dept. of Architecture, Faculty of Engineering, Tokyo Metropolitan Univ., M. Eng. Prof., School of Architecture, Graduate School of Engineering, Tokyo Metropolitan Univ., Dr. Eng.

ことに大きな原因があるように思われる。今、改めて学校現場における実態を的確に捉え直し、これを計画につなげていくという基本的立場に立ち返る必要があると考える。

1. 3 既往研究に対する位置づけ

「O.S.・多目的スペース」が公立小学校に登場して以来、この使われ方の実態を報じる文献は、学会大会論文を中心として数多くの蓄積をみているが、これらはいずれも断片的であり、計画系論文集等によるまとまった論考は意外に少ない。この中で、鈴木は、実習活動が校内様々な場所で多様に展開されている実態を分析し、小学校における実習スペースの再編成の可能性を検討している(文献(5))。また、柳沢は主として休み時間等における児童の「行動場面」を取材する中から、児童の行動領域からみた学校の空間構成を論じている(文献(3)、(4))。これらはいずれも小学校の空間計画を再検討するにあたって優れた知見を導いているが、児童の学習・生活行動の全般を扱おうとする本研究とは若干、立脚点を異にする。

連名著者のうち上野は、文献(1)、(2)により当時黎明期にあった小学校のO.S.についてモデル的な事例を取り上げ、その使われ方を論じている。しかし、これから既に10年以上が経過している。この間、前稿でも明らかにしたように、

- 1) 今日では様々な教科領域において調べ学習、観察、実習等、児童自らが体験的に学ぶ学習形態が幅広く試みられるようになっている
 - 2) 「生活科」や「総合学習」等にみられるように既成の教科の枠を越えた学習活動が実践されるようになり、学年スペースで展開される学習活動にも多彩な広がりがみられるようになってきている
- 等の状況の変化があるといえる。こうした状況を今、改めて捉え直し、ここから小学校の学年スペース周りの建築的構成のあるべき姿を再検討しようとするのが本研究の目的である。

2. 調査方法

本研究では、教育・運営方針、建築的な特徴を考慮して表・1に示す公立小学校5校を調査対象とし、学年スペースに焦点をあて、各学年または低中高各1学年について以下の調査を行った。

- ①家具配置実測調査： 調査対象とする学年のC.S.、O.S.等の学年スペース周りについて家具配置の実測を行い家具配置マップを作成した。また展示物や家具に納められている内容等を詳細に記入した。
- ②クラスの終日追跡調査： 1日の学習・生活活動の展開について登校時から下校時までの様子を、クラス単位に活動内容、活動場所、集団編成に着目して時系列に沿って記録した。
- ③児童の学習・生活活動展開調査： 家具配置マップの上に児童の1日の学習・生活活動展開の様子をプロットし、行為の内容や姿勢等についても詳細に記録した。なお、この記録は授業時間、自由時間共に15分間隔に行い、更に児童の活動形態・内容に変化が見られた場合には、この間の変化を記録した。

結果として本論文では96、97年度に行ったこれらの調査のうち、低中高3学年（3校計9学級）または全6学年（2校計12学級）の計21学級の調査記録を扱うこととして分析・考察を行った。

3. 家具配置からみた学年スペースにおけるコーナーの形成

3. 1 家具配置により形成されるコーナーの種類

調査①によって得られた学年スペース全体の家具配置マップを詳

図・1 クラス集団の活動場所別滞在時間内訳 (文献(8)再掲)

表・1 調査対象校概要

学校名	所在	建設年	学級数	調査日	学年スペースの建築的特徴
打瀬小学校	千葉市	95	12	96.06.20	低学年棟：1列に並んだC.S.と中庭のセットをつなぐリニア形態のO.S.をもつ。各C.S.の横にはアルコーブがつくられている
			15	96.10.07	中学年棟：C.S.をつなぐO.S.の他にWSがある。1,2Fをつなぐ大階段が特徴的。教室の間に1カ所、ガラスで囲まれた小部屋がある
			16	97.07.03	高学年棟：吹抜階段を囲んで向かい合わせに配置されたC.S.やアルコーブに挟まれたO.S.
			16	97.11.10	
豊田小学校	千葉市	92	14	96.07.01	クラスルーム空間がこれとほぼ匹敵するO.S.に連続する学年クラスターを基調とした計画。典型的なオープンスペーススクールのプランタイプといえる
下平間小学校	神奈川県	87	12	97.11.04	廊下とC.S.の間に壁のある従来型プランタイプの一例。廊下を挟んで教室が並ぶ中廊下型プラン。廊下を挟んで北側に手洗いや階段室、南側にC.S.を配置。3、4階にそれぞれ1カ所ずつ、C.S.に向かい合う1.5教室分の「多目的ホール」が設けられている
福光東部小学校	富山県	82	15	97.11.19	学年スペースを固定的な間仕切りを置かない大規模なオープンスペースとして取り、この中をその都度2mグリッドの可動間仕切りによって自由に構成できる計画
本町小学校	神奈川県	84	14	97.10.29	中央の吹抜に全校対応の多目的ホールを配置し、それを取り囲む形でC.S.とO.S.からなる学年クラスターが計画されているコンパクトな平面計画。ホール型オープンスペースを持つ代表的な一例

細に検討し、これに調査②、③による学習・生活活動展開の実態を重ね合わせてみると、C.S.、O.S.は決して均質的な場ではなく、そこには固有の活動に対応しようと意図して設けられたゾーンや、家具・メディアの設置の組み合わせによって特定の機能を持たせようとしたコーナー等が多様に形成されていることに気付く。これらの事例の一端は図・2に示すとおりであるが、ここではこれらのゾーンやコーナーを「学習・生活のためのコーナー」と定義し、それらの機能・目的・内容に従って分類・整理する作業を行った。

これらのコーナーをそれぞれの使われ方、機能等により整理すると、学習活動のための環境を構成するもの、生活活動のための環境を構成するものがあることが分かる。しかし、生活環境として用意される水廻りコーナーが実習学習等でも頻繁に利用されたり、児童の学習機が生活活動の食事に使われる等、実際には多くのコーナーが学習、生活どちらの場面でも利用されている実態がある。これらの関係を図・3に示した。また、これらのコーナー全13種類とその内容を学習活動に関連の深いものから順に整理して表・2に示した。

これらのうち最も普遍的なものは、C.S.内の個人用机やO.S.でのテーブルやキャレル類等によって設けられる様々な学習・生活活動に対応できる[A：一般活動スペース]である。これには、1人1人の児童に対応して座席が決まっているC.S.内の[A1：一般活動スペース]と、O.S.における汎用テーブルのように共用的な性格の強い[A2：一般活動スペース]の2種類がある。

生活環境を構成するものとしては、児童の持ち物や掃除用具等の

る場合やO.S.の一角に設える場合等、その設え方には差異がある。

なお、図・2-A)に示した打瀬小・高学年スペースの事例はC.S.内の[A1:一般活動スペース]及びO.S.内の[A2:一般活動スペース]ともその機能を若干異にしており、日常的に取り組まれている学年チームティーチング(以下:T.T.)において学年メンバー全員が集まる場所を空き教室*2を利用して設けているケースである。類例の事例は本町小でもみられた。

2) 情報関連コーナー： 学習メディア環境を構成する図書コーナー、AV(主にテレビ)コーナー等は頻度高くみられるようになってきている。コンピュータコーナーを設えている学校は調査時点では本町小の事例に限られ、コンピュータを特別教室等で管理する方式を取っている学校が多いことが窺える。また従来、各C.S.に1台ずつ取り付けられることの多かったテレビはO.S.に学年共用の校具として設えられることが多くなっていると思われる。

3) 学年による差： コーナーの形成の状況は学年による違いというよりは、担任教師やそれぞれの学校の運営方針、平面型等による違いが大きいと考えられる。しかし、高学年になるほど図書や学習材のコーナーが充実し面積的にもそれらの占める割合が大きくなる傾向や、低学年は高学年に比べ家具の密度が低く、広いスペースを設けようとする傾向等がみられる。また、高学年については、特別教室で行う専門的な実習学習活動とO.S.周りで可能な実習活動の内容を理解し、それらの連携をとることが必要となってくる。

4) プランタイプによる差： 当然ではあるが、C.S.とO.S.との位

置関係やO.S.の建築的な空間構成の違いによって、コーナーの在り方も影響を受ける。特にO.S.を持たない下平間小では、荷物かけや展示等により廊下側の壁面を利用しているが、ほとんどのコーナーがC.S.内で完結しており、O.S.を有する学校に比べ、種類も配置の仕方も多様性に欠けている。

3.3 コーナーの形成頻度とその組み合わせ

各学校の学年スペースにおけるコーナーの形成実態を、面積の大小、家具の数等に関わらずその有無に着目してまとめてみると、結果

学校名	打瀬	豊田	下平間	福光東	本町
調査日	961007	971110	960701	971104	971119
学年	123456	123456	123456	135136135	135
学習環境構成要素	A一般活動スペース	CS			
	B図書コーナー	CS			
	C AVコーナー	CS			
	D コンピュータコーナー	CS			
	E 展示・掲示コーナー	CS			
	F 学習材コーナー	CS			
	G 教員コーナー	CS			
	H 教師コーナー	CS			
	I 生物コーナー	CS			
	J 水廻り	CS			
生活環境構成要素	K 持ち物収納コーナー	CS			
	L 掃除用具収納コーナー	CS			
	M ラウンジコーナー	CS			
		CS外			

図・5 学校・学年別にみた各コーナーの有無(凡例■:有 □:無)

図・4 小学校におけるコーナー形成の事例(高学年スペース)

は図・5に示す通りとなる。[A:一般学習スペース]と[H:教師コーナー]、[G:教具コーナー]、KやLの[収納コーナー]は、どの学校にも設けられており、学年スペースを計画する上で基本となる部分と考えられる。特に[K:持ち物の収納コーナー]は、授業中に児童が物を取りに行くことや管理の点からもC.S.から視線の通る場所に設置することが望ましい。

生活科や総合学習等の教科の枠を超えた学習活動への対応を考慮すると、学習メディア・情報コーナーや実験・実習学習のための水廻り等を備えたコーナーが一般学習スペースに付属して必要となると考えられる。更に、児童の生活の場として学年スペースを考えていく上では、児童のくつろぎの場となるラウンジコーナーやアルコーブ等の児童の身体寸法に適した小空間を設けたり、動植物を育てるコーナー等を外部空間との関係を考慮しながら形成していくことも大切となろう。

4. 児童の行動からみた学年スペースにおける場の形成

4.1 学年スペースにおける学習・生活の集団編成の類型

小学校における児童の1日の学習・生活活動の様子を[活動内容]、[活動場所]、[集団編成]に着目して継続的に観察してみると、1つの学年スペースの中でも児童は様々な集団を形成しながら、多様に展開していることが分かる。この一事例を図・6に示した。以下では、これらの多様な集団編成の場への展開の仕方に着目し、空間との対応関係について考察を行う。

調査③より得られた児童のプロット図により、自由時間を除く学習活動場面と生活活動場面の中で形成されている集団編成の在り方を全て収録した。それらを学習・生活のそれぞれについて活動内容と集団編成の違いに着目しながら分類してみると[学年一斉]、[クラス一斉]の形式以外にも、学年やクラス集団に一度集めた後、更に小規

模の集団に再編成する例等が数多く見られた。個人のテーマや学習進度に合わせてそれぞれが好きな場所へ展開する[個別]や、習熟度に合わせていくつかの集団を編成する[習熟度別]、作業の進度に合わせて「課題の終わった人は、〇〇をする」といった[作業進度別]、等の展開がクラスや学年を母集団として様々な場所を選びながら行われている。これらを整理・検討することにより、表・3に示すように学習活動をa～kの11種類、生活活動をあ～かの6種類の展開に分類することができた。これらの展開が学年スペースのどこで起こっているかをみると、同じ活動内容でも、O.S.を利用する例、C.S.を利用する例、広く学年スペース全体に展開する例等様々であり、学校や担任教師の指導方針のみならず、それぞれの学年スペースの建築的要素や空間の構成が活動展開の可能性・多様性に多分に影響していることが推測できる。

4.2 学習活動場面にみられる場の組み合わせと展開

小学校では、学年内でもクラス毎に時間割が異なることが多いため、前節で分類した学習活動場面にみられる集団編成a～kは学年スペースの中で様々な場所を選びながら多様な組み合わせで起こっている。その典型的事例を以下に説明する。

1) 学年全体が同時に幾つかの集団を形成するタイプ： 打瀬小では各クラスが学年共通の時間割を取っているため、一つのクラスのみが展開することは少なく、学年が一斉に展開する。そのため学年スペース全体が有効に使われることが多い。図・7-⑨4年生の展開は[d:習熟度別展開]において学年スペース全体を[一斉学習の場]と[少人数指導の場]、[個別学習の場]の3カ所に分けて利用している事例である。

2) クラス毎に異なる活動を展開するタイプ： クラス毎に時間割が異なる萱田小(図・7-⑦⑭⑮)では、同じ学年スペースの中で、それぞれのクラスが異なった活動を展開する場面がよくみられた。具

図・6 1日の学習・生活活動の展開(本町小学校1年生 971029)

表・3 学年スペースにみられる集団編成とその分類

場の種類	内容
a 学年一斉	学年一斉に集合して学習活動を行う
b クラス一斉	クラス一斉に集合して学習活動を行う
c 個別	学年をいったん統合した後、個別に展開する
d 習熟度別	学年を統合した後、習熟度別に編成し直し学習活動を行う
e テーマ別	学年を統合した後、各自の学習テーマや作業内容毎にグループを編成して学習活動を行う
f 班・グループ別	学年を統合した後、席などにより決められた班や自由にグループを編成して学習活動を行う
g 個別	1クラス内で個別に展開して学習を行う
h テーマ別	1クラス内で各自の学習テーマや作業内容毎にグループを編成して学習活動を行う
i 班・グループ別	1クラス内で各自の席などにより決められた班や自由にグループを編成して学習活動を行う
j 作業進度別	1クラス内で各自の学習・作業進度により終わった児童から順に別の活動をする
k 習熟度別	1クラス内でT.T教員などの指導参加により習熟度別に編成し直し学習活動を行う
集会	あ 学年一斉 朝の会、帰りの会等の日常的に行われる集会活動を学年一斉に行う い クラス一斉 朝の会、帰りの会などの日常的に行われる集会活動をクラス単位で行う
給食	う 学年一斉 学年一斉に集合して給食を食べる え クラス一斉 クラス単位で給食を食べる お 各自自由 各自自由に集団・場所を決めて給食を食べる か その他 給食を食べる集団をくじ引きなどによって決めている

図・7 学年スペースにおける学習活動の展開事例

体的には、⑮に示されるように2つのクラスの異なる活動が1つのO.S.内で同時に展開している場面等である。

3) C.S.を主な活動の場とするタイプ： O.S.を持たない下平間小では、学習・生活場面における活動の展開はC.S.内に限られており、クラス一斉以外の集団編成が起りにくい。また、グループ別や学年一斉等の学習展開がある場合にもC.S.のみを活動の場としており(図・7-②③)、3、4階に設けられている多目的ホールを利用してはみられなかった。このホールは廊下の一部分を拡張したような形で、C.S.と向かい合った位置に設けられている。廊下と同様にコンクリート壁とタイル床で仕上げられており、音が響くため、他のクラスへの騒音の配慮から教師にとって利用しにくい場所になっているようである。

4.3 活動展開の実態

調査②、③によって得たデータから各学校、各学年に出現した集団編成のタイプを全て抽出し、図・8に示した。集団展開の仕方は学校、学年、その日のカリキュラム等により様々ではあるが、学習活動の展開としては「クラス一斉-C.S.」がどの学校においても主要な場面であり、C.S.が依然として「教室」の役割を主としていることが分かる。しかし、O.S.を連続的に利用することで、学年スペースの中では内容・集団編成ともに多様な組み合わせで活動が展開している。このことは今後、学年スペースを構成していく上で十分に考慮する必要があると考えられる。

4.4 活動展開とコーナーの対応関係

学年スペースには、前節までに述べた多様な集団の展開によって形成される「場」と、家具や設え等で構成されるコーナーという物理的要素により形成される「場」とが存在していると解釈できる。そして、これらは以下のように相互に対応し、影響を与え合っていると考えられる。

コーナーが活動展開に与える影響： 児童の行動や活動展開は、多くの場合、家具等の物理的要素に誘発されている。そのため、空間に対して積極的にコーナーを設えている学校では活動展開も活発であり、円滑に行われているといえる。また、形成されるコーナーの密度も活動展開に大きく影響していると考えられ、児童数や活動の内容に適した家具の配置・密度を考慮することも重要である。

一方、クラス単位・一斉形式の活動を主体としている学校では学習・生活活動に必要なほとんどの家具や教育機器をC.S.内に揃え、O.S.は「教室に置けないものを置く」補助的な空間として認識しているように思われる。そのような学校では、O.S.には活動を誘発するような積極的な設えがなされず、活動の多くが自ずとC.S.を場として展開され、O.S.は余白的な場となる。

しかし、コーナーが形成されていない広々としたスペースが、単に用途のない、余白的な場であるとも限らない。各校における活動展開の実態を詳細にみると、学年集合の場、広いスペースを使う床作業の場等に利用される場面が意外と多いことに気付く(図・9-①②③)。家具の置かれないうちのスペースは、このような活動を取り入れている学校においては、利用頻度の高い重要な場となっている。特に床座での活動や活発な動作を伴う活動が頻繁にみられる低学年用の学年スペースでは、空間やコーナーを構成する際にそのような活動を考慮に入れることも重要である。

活動展開がコーナーの形成に与える影響： 前述したように活動展

学校名	打瀬	菅田	下平岡	福光東	本町
調査日	960620	961007	970703	971110	960701
学年	123456	123456	123456	123456	123456
学習活動	a 学年一斉	CS			
	b クラス一斉	CS			
	c 個別	CS			
	d 習熟度別	CS			
	e テーマ作業内容別	CS			
	f 班グループ別	CS			
	g 個別	CS			
	h テーマ作業内容別	CS			
	i 班グループ別	CS			
	j 作業進度別	CS			
生活活動	k 習熟度別	CS			
	あ 学年一斉	CS			
	い クラス一斉	CS			
	う 学年一斉	CS			
	え クラス一斉	CS			
	お 各自自由	CS			
	か その他	CS			

*96年6月 打瀬の2年生は社会科見学で午前中は外出
 **97年11月 打瀬の3年生は社会科見学で午前中は外出
 打瀬の2年生は午前中「いも祭」のため家庭科室・屋外など

図・8 学校・学年別にみた集団編成のタイプ (凡例■:有 □:無)

図・9 活動展開と場の対応

開, 児童の行動は物理的要素に誘発されているといえるが, 活発に活動を展開する学校では, 活動の展開を予測した上でコーナーを形成していると思われる幾つかの事例がみられた。

打瀬小では[学年集合]のためのスペースや空き教室が必ずどの学年にも設けられていたり, O.S.の[一般活動スペース]の周辺には学習材や学習メディアのコーナーが設置されていたり(図・9-④), と活動の展開を考慮してコーナーを形成している例が多々みられる。また, 図・9-⑦の萱田小の例では, C.S.で行われる演習授業との連携を考慮してC.S.から溢れ出すような形でテーブルを配置することで添削コーナーを設けている例等がみられる。

以上のようにコーナーの形成と活動の展開は, 当然のことながら, 相互に影響を及ぼし合っているといえる。従って, 活動と設えとの相互の対応関係を考慮して空間を構成していくことが, より充実した学年スペースを形成していくことの手掛かりとなると考えられる。

5. まとめ コーナー・活動展開からみた学年スペースの構成

このように小学校の学年スペースは様々な要素を持った「場」の組み合わせによって構成されていると解釈できる。家具・メディア等の設えによるコーナーと弾力的で多様な形式の活動展開の関係を十分に考慮しながら学年スペースを構成することは児童の学習・生活活動をより多様化・活発化させる大きなきっかけになると考えられる。従来, ともすれば均質的・画一的に計画してきたC.S., O.S.も詳細に検討すると, この様な多彩な場によって構成されている事実を, 小学校学年スペース計画にフィードバックさせる必要性を強調したい。

そこで図・10はこれまでに述べてきた考察を統合して, 学年スペース周りに必要とされる「コーナー」, 「活動展開」の構成要素を, 相互の繋がりを考慮しながらスペース構成のダイアグラムとして表現した提案である。このダイアグラムでは「多様な学習・生活活動の場」の拠点としてのO.S.に一般活動スペースや情報関連のコーナー等を充実させる考え方を示した。また, 児童の居場所となる家庭的なスケールのラウンジコーナーをC.S., O.S.と連続した位置に設ける考え方を提案してみた。

このダイアグラムには詳細に表現し得なかったが, 学年段階による構成の違いについて実態に基いてその大きな傾向を考察してみると, 以下の諸点についての留意が必要になると思われる。①低学年スペース: 広々と床に広がることのできるスペースを多く設ける。床座での集合や作業場面を考慮した床の仕上げを考慮する。②中学年スペース: ある程度の実験・観察的な作業, 工作等の活動が可能なスペースや家具を充実させる。③高学年スペース: 調べ学習・個別学習に対応できる学習メディアや学習テーブル・机等の充実。特別教室における専門的な活動と学年スペース周りで行える活動を把握し, 相互の連携を考えてそれぞれに求める機能を整理する。等を児童の発達段階におけるスケール感の違いに配慮して計画する。

なお, 本稿での調査対象及び分析・考察は学年2~3クラス編成のいわゆる一般規模校を対象としたものとなっており, 従って図・10の構成ダイアグラムも学年2~3クラスの複数クラスの場合を想定したものである。しかし, 我が国の小学校の全般的な状況は, 学年単学級及びそれ以下の規模の学校が大きな割合を占めることは周知のことである。これら小規模学校には, 本稿で述べたものとは全く別の視点からの調査・分析・考察が必要となるが, これについては現在,

図・10 学年スペースの構成例

図・11 コーナー領域の設定例^{*3}

別途の研究を開始しているところである。結果がまとまり次第別稿を報じたい。

謝辞

調査に御協力頂いた各校の諸先生方に深く感謝申し上げます。また, 調査活動の中で御協力・御指導いただいた伊藤俊介氏, 上野研究室の皆様には謝意を表します。

- *注1) 本研究では, C.S.及び学年O.S.を含めた1つの学年ユニットを「学年スペース」として扱っている。
 *注2) 打瀬小学校6年が集合スペースとして利用している室は開校当初「書道室」として利用していた場所である。
 *注3) 本研究では児童の動作寸法を考慮して1つの家具が形成するコーナーの占有領域を全ての家具に対して図・11に示すように設定した。

参考文献

- (1) 上野 淳, 連 健夫: 小学校オープンスペースにおける場・コーナーの形成に関する分析—小学校オープンスペースの使われ方に関する調査・研究(1): 日本建築学会計画系論文報告集, 第386号 pp.90-100, 昭和63年4月
- (2) 上野 淳: 小学校オープンスペースにおける学習展開に関する分析—小学校オープンスペースの使われ方に関する調査・研究(2): 日本建築学会計画系論文報告集, 第406号 pp.73-85, 1989年12月
- (3) 柳沢 要: 小学校オープンスペースにおける児童の行動領域形成について—児童の行動場面から見た空間解析に関する研究 その1: 日本建築学会計画系論文報告集, 第424号 pp.31-42, 1991年6月
- (4) 柳沢 要: 小学校における児童と物理的環境相互の関連に関する考察—児童の行動場面から見た空間解析に関する研究 その2: 日本建築学会計画系論文報告集, 第435号 pp.51-58, 1992年5月
- (5) 鈴木賢一: 小学校における多目的スペースと教室の機能関連に関する研究: 日本建築学会計画系論文報告集, 第489号 pp.121-130, 1996年11月
- (6) 倉斗 綾子, 茂木 弥生子, 上野 淳: 学年スペースにおけるコーナーの形成実態からみた小学校の空間構成に関する考察—学習・生活活動の実態から見た小学校の建築計画に関する研究(4): 日本建築学会大会学術講演梗概集(九州) E-1, 1998.09pp.235-236
- (7) 倉斗 綾子, 茂木 弥生子, 上野 淳: 学習・生活活動の展開における場の形成実態からみた小学校の空間構成に関する考察—学習・生活活動の実態から見た小学校の建築計画に関する研究(5): 日本建築学会大会学術講演梗概集(九州) E-1, 1998.09pp.237-238
- (8) 倉斗 綾子, 上野 淳: 小学校における児童の1日の学習・生活活動の実態: 日本建築学会計画系論文報告集, 第520号 pp.139-145, 1999年6月

(1999年7月10日原稿受理, 1999年12月9日採用決定)